

## Xに成ること

Becoming X

## ドミニク・チェン

Dominick Chen

情報技術は人間の知覚を拡張したのだろうか。ケータイやスマートフォンといったデバイス、Google Earthやカーナビといったソフトウェア、メタバースやソーシャル・ネットワークのようなオンライン・プラットフォーム、そしてネットワークをリアルタイムに飛び交う無数の情報——これらは義体（prosthesis）的に私たちの生来の知覚器官に覆い被さるかたちで、私たちが本来見えないものを見せ、聴こえないものを聴かせてくれる。

しかし私たちははまだ人間の、しかも自分個人の環世界を脱することはできない。少々奇妙な表現を試みてみれば、私たちの心の理論は自己認識の檻のなかに閉じ込められている。

私たちは他者に成ることができないのだろうか。

もちろん、ミラーニューロンの働きや、エージェンシー認知の機構が解明されるにつれ、言語以前の段階で私たちは他者を含む周囲の環境と実に多様な交感を行なえることがわかっている。幻肢のように、神経が馴致してしまった結果、すでに喪失した器官を知覚し続けてしまうという「能力」さえ備えている。しかし、これらはすべてその個人の領域に属する個人史の振幅の範囲に止まることであり、基本的に「未知」の他者との交換可能性は閉ざされている感がある。

**毛利悠子**は一貫して計算機になること、情報機器になることのリアリティを追究し続けてきたアーティストであり、**田中浩也**は愚直なまでに自然

（動植物）と人間の距離を詰めようと試み続けている。これはチューリング・テストのように、計算機が知性を持っていると判定できるかという問題とは別種の事項に属する。なぜならばここで問われているのは私という主観性が、圧倒的に外部に属する存在——機械そのものであったり、機械化されたゴッホであれ、機械と対話するジュウシマツであれ——にどこまで接近できるかという関係性の問いであるからであり、客体的な人工物に自律的な主観性が宿るかということではないからである。

さらに言えば、前者は情報を生命に帰属させるが、後者は生命現象を情報のレベルへと還元しようとする。後者は他者から自己に向かいながら「成ること」を「在ること」に記述しようとし、前者は自己から他者へと向かうべく「成ること」をそのまま保持または再現しようとする。ここには重大な哲学=生存戦略の差異があることに留意しよう。

ここではゴッホに成る（devenir-ゴッホ）ソフトウェアやジュウシマツに成る（devenir-ジュウシマツ）アルゴリズムを単一の作動系として見なすのではなく、つねにそれと呼応し、カップリングする身体を想定しなくてはならない。すなわち、怪物化したゴッホ・マシンと対峙する人間、そしてスード（pseudo）・ジュウシマツと声を競わせるリアル・ジュウシマツおよびほかの鳥類を含めたシステムを。

成ることが書くことと同義であるとするれば、私たちはすでに存在しているものに成ることはできない。私たちはつねに自らがその生成に関与するかたちで/にしか成ることができない。関係を持つということは、無意識であれ意識的であれ、それほどまでに能動的な所作なのである。

同様に情報が生態的な振り舞いを持つということは、情報の集積に生命が宿るということではなく、その情報体と関わる他者との相関において作動を成す形態が外部の観察者からは単一の系としてしか見なせない